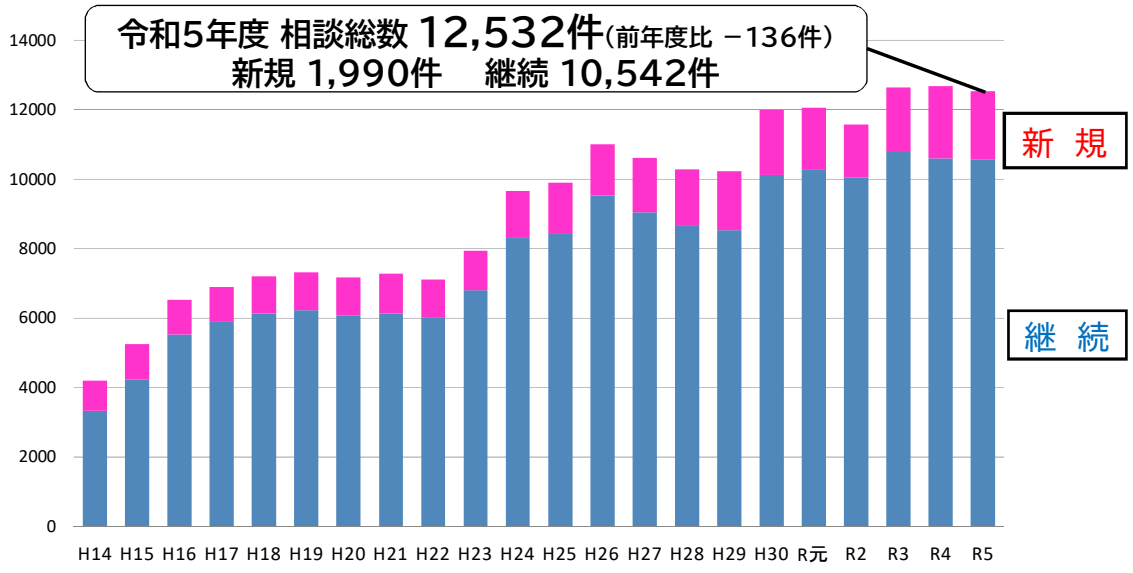
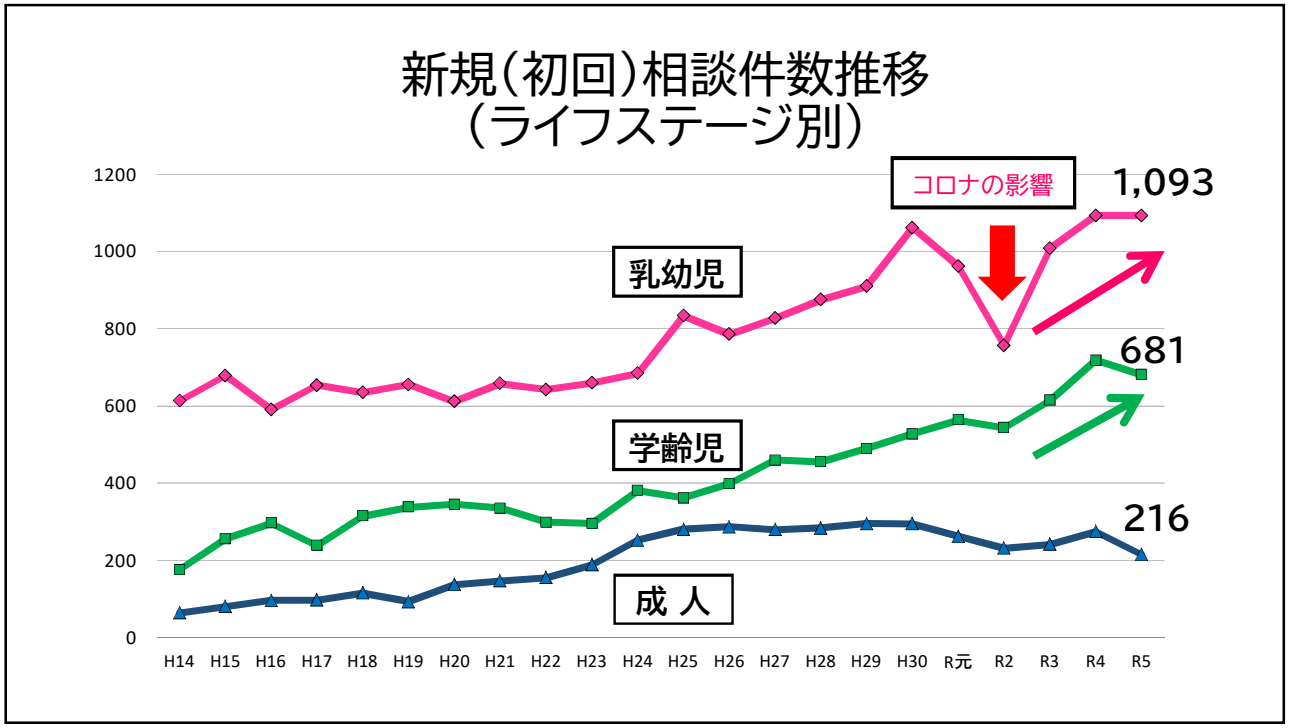
アーチル発達障害基礎講座（初任支援者向け） 第二部

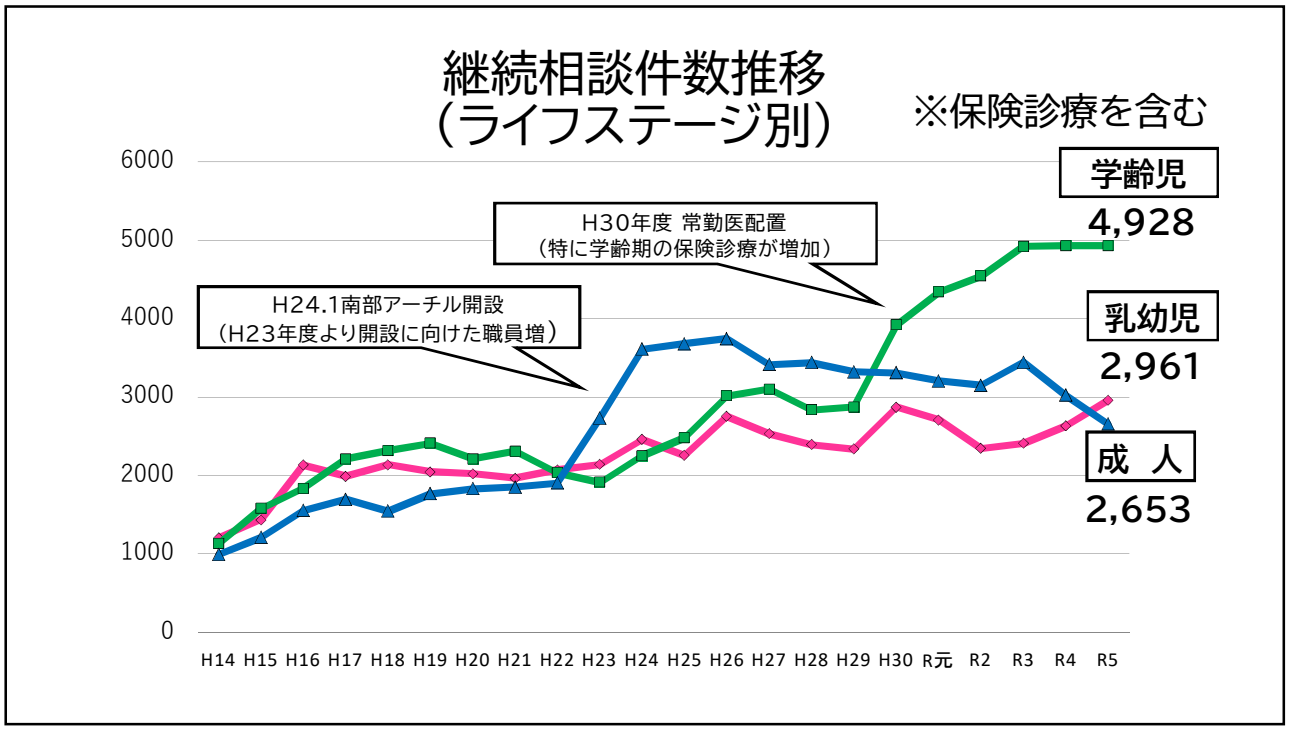
# ２　アーチルの相談の現状と課題

## ～ 様々なニーズに対応するために ～

## 相談件数 推移（全体）




新規(初回)相談件数推移
(ライフステージ別)
コロナの影響
1,093
乳幼児
681
学齢児
216
成 人
1200
1000
800
600
400
200
0
H14 H15 H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R元 R2 R3 R4 R5


継続相談件数推移
(ライフステージ別)
※保険診療を含む
学齢児
4,928
H30年度 常勤医配置
(特に学齢期の保険診療が増加)
H24.1南部アーチル開設
(H23年度より開設に向けた職員増)
乳幼児
2,961
成 人
2,653
6000
5000
4000
3000
2000
1000
0
H14 H15 H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24 H25 H26 H27 H28 H29 H30 R元 R2 R3 R4 R5

## 乳幼児相談の現状と課題

- 早期出会いはほぼ実現できている。
- 新規相談時、すでに保育所や幼稚園等に在籍しているケースが増加している。
- 多くの保護者が発達障害について調べて来所しているが、氾濫する情報に混乱している場合も少なくない。
- 知的障害や発達障害の特性が顕著ではなく、障害特性が分かりにくい児の相談が増えている。
- 養育上の課題を抱えた家庭の増加、DV・虐待等が複雑に絡み合っている相談も増加している。

## 学齢児相談の現状と課題

- 新規相談のほとんどが、通常学級在籍の児童。学校での不適応や、学習不振などから、発達障害を心配しての相談が多い。
- 発達特性は顕著ではないが、メディア機器の長時間使用や、生活習慣の乱れなど、望ましくない養育環境の二次的な問題により、生活上の支障が出ているケースが増えている。
- 知的な遅れがなく、発達特性も顕著ではないが、生活上の困り感が強いことによる障害福祉サービスの利用希望が増えている。
- マルトリートメント、非行、不登校などの問題がいくつも絡み合い、アーチルだけでは支援困難なケースが増えている。
- 重度の知的障害を伴い、自傷他害やパニック等の行動障害を二次的に生じているケースも少なくない。

## 成人相談の現状と課題

- 継続相談が多く、中でも高校卒業後～20歳代の相談が多い。
- 成人期を迎えてからの新規相談では、就労の躓きなどにより本人が自ら相談を希望するケースと、長期在宅などにより家族が心配して申込みをするケースが大半を占める。
- 子どもの相談でアーチルに来所した保護者が、自身の発達について相談を希望する例も珍しくない。
- 触法、長期引きこもり、家庭内暴力、精神科系疾患併発等、問題が複雑に絡み合った対応の難しいケースも増えている。
- 医療的ケアのある重症心身障害者や、行動障害のある方などより手厚い支援の必要な方々の住まいの場や、より専門的な支援の担い手が不足している。

## まとめ：相談の現状から

・発達面の心配をベースに、関連した様々な相談がアーチルに寄せられている。

・アーチルだけでは対応が難しい支援ニーズに対応するためには、子育て・教育・労働・司法・医療・保健など、各分野を越えた連携が必要。

・加えて、地域の身近な場所で相談支援が受けられる支援体制の整備も必要。